

森やその付近での遊びの移行に関する研究 — 遊びの「場所」と「活動」に着目して —

河口 麻希¹・森 依子²・侯 盛濱²
城田 花弥²・七木田 敦³

A study of children's play transition in the forest environment — Focus on the play area and play activity —

Maki KAWAGUCHI¹, Yoriko MORI², Hou SHENGBIN²,
Kaya SHIROTA², Atsushi NANAKIDA³

Abstract: This study attempts to clarify the process of play transition in the forest and its environs. The play activity of children in kindergarten is constantly evolving alongside changes of the components of play, including activity (action or movement), roles, rules, and the physical environment (Sato, 2004). By observing children who were playing in nursery-rooms, playrooms, and playgrounds, Sato discovered that the scale of communications among children at play is wide. To clarify how play transitions to the forest, an observational study of children playing in the forest near their kindergarten was conducted. The results affirmed three forms of play transition: transition of place, transition of activity, and transition of both place and activity. By analyzing the circumstances of the three forms of play transition, it was found that discoveries and applications of the natural environment are related to the opportunities arising from play transition. Furthermore, the observations of transitions of both place and activity revealed that the transition of place itself is often seen by the children as a type of play activity. This may be related to both the much wider expanse offered by the forest and the ongoing communication between the children.

Key words: kindergarten's children, the forest, play transitions, a play area, a play activity

問題と目的

幼児が幼稚園で遊ぶ際には、ある一つの場所に留まり続けるということではなく、保育者が工夫して構成している環境の中で遊びに没頭したり、遊びを移行したりしながら生活している。このような遊びの移行の要因として、佐藤ら(2004)では、「視覚的な関係(他の遊びを見ることが出来る)」と「聴覚的な関係(呼びかけあうことのできる)」の場において、お互いの姿を確認したり呼びかけあったりする様子が観

察されており、視覚・聴覚的な関係が遊びの移行のきっかけとなることを示唆している。つまり、幼児の遊びの移行のきっかけには、人とのかわりが影響を与えていると考える。このことは園内のどのような場所でも起こりうることなのだろうか。中西ら(2010)は「森の幼稚園カリキュラム」における自然との相互作用について、幼児の具体的な変容プロセスを長期的に他者とのかわりに着目することを通して明らかにした。その結果、対象児は次第に積極的・主体的に自然や他者とかわるようになっていった。このことから森での遊びを長期的な展望で検討すると、活動の内容が移り変わっていくことは明らかになった。

1 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期
2 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期
3 広島大学大学院教育学研究科附属幼教育研究施設

以上のように、園庭だけでなく、森のような木々の生い茂った自然が隣接している環境の中においても、人的環境が幼児の遊びにはかかわると考える。しかし、森やその付近といった自然物が多数存在する空間では、人的環境だけでなく、物的環境の影響も大きい。幼稚園教育要領においても「環境」の項目では、「身近な環境に親しみ自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ」ことが「ねらい」として規定され、「自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに気づく」などが「内容」として記されている(文部科学省2008)。また、幼稚園における園具・教具に関しては、「樹木等が遊びの障地に使われるなど、本来、園具・教具とはいえないものであっても幼児は園具・教具と同じように関わっていくこと」が考慮されるように園全体の環境の整備が求められており、一つの園具・教具でも、一人一人の幼児、発達の過程によってその持つ意味が変化すると明記されている(森上ら2013)。

このような物的環境は「モノ」と「空間」によって構成されており、「人」と「モノ」と「空間」があることでそこに「場」が成立する(小川2000)。したがって、遊びにはその「場」にどんなモノや空間が存在しているのが要因となり得る。幼児の遊びの場において、それらを構成する何かが変わるときに遊びも移行していると考え、「人」とのかかわりだけでなく、物的な環境要因から何が変わったのかを明らかにしていくことが必要である。つまり、遊びを展開する「空間」の大きさも幼児の遊びの移行に関係すると考える。

佐藤ら(2004)は、保育室・遊戯室・園庭を対象として幼児の遊びの移行を観察した結果、園庭へと場所が外へ移行する方が、交流の空間スケールは大きいことを明らかにした。したがって、保育室などの屋内や園庭よりさらに広い「空間」が広がる森やその付近では、スケールの大きな遊びが展開するのではないだろうか。スケールの大きな遊びができる環境の中で、幼児はどのようにして遊びの「場所」や「活動」を移行しているのかに着目することで、その環境の空間の大きさから見た幼児の遊びの移行における実際を明らかにできると考える。

そこで本研究では、森やその付近での幼児の遊びがどのように移行するのかを明らかにすることを目的とする。その際に、幼児の遊びの「場所」や「活動」がどのように移動・変化したの

かに着目して、森の特性と共に検討する。

方法

(1) 対象

観察対象園は、3歳児クラス、4歳児クラス、5歳児クラスが各1クラスという学級編成である。本幼稚園の園外観図は図1のようになる。観察園では、敷地内に森を有しており、森とその付近で遊ぶ幼児を本研究の対象とした。ここでの「森」は、本幼稚園の出している案内図をもとに、幼稚園内で「森の日」に子どもたちが活動する場となる、樹木などの植生している「森」をその範囲として定めた。また、本幼稚園で設定されている「森の日」では、子どもたちは森とその付近である山際で活動する。そのため、観察の際には、森もしくはその付近である山際で遊んでいる幼児を対象とした。また、森で遊んでいる多くの幼児の姿を捉えたいと考えたため、幼児の年齢は特に限定せず観察を行った。

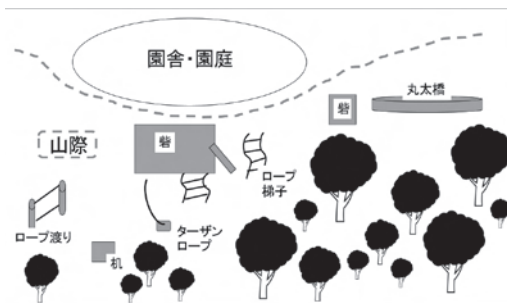


図1. 森とその付近の見取り図

(2) 観察期間

観察は、2014年5月15日(木)から2014年6月26日(木)の計5回行った。観察時間は、毎週木曜日の9時から10時までの60分程度であった。当該の時間帯は、3歳児、4歳児、5歳児どのクラスにおいても自由保育が中心であった。

(3) 分析方法

本研究は、①エピソード記述でのデータ収集②エピソードの抽出③データの分析という手順で行った。

①エピソード記述でのデータ収集

森やその付近で遊ぶ幼児の姿を、観察者によって自然観察法で観察した。その際、記録の方法は、エピソード記述を用いた。また、その後分析する際に記憶の補助となるようにデジタルカメラによる写真記録も行った。その際、幼児の遊びの妨げにならないように注意しながら

1台のデジタルカメラを使用した。

②エピソードの抽出

次に、観察者によって収集したエピソードを抽出した。同時刻に観察しているの、エピソードの内容や時刻を照らし合わせて、場面が重なるエピソードがないか検討した。また、保育環境は保育者の意図により構成されており、その環境を幼児は保育者が居ない中でどのように活用しているのかを検討するために、大人不在の幼児集団での遊びの移行場面を抽出した。その結果、エピソードの数は14事例になった。

③データの分析

また、観察者により収集した事例が幼児の遊びの「場所」もしくは「活動」による移行かを観察者で協議し、明確にしたうえで分類した。その際、観察から得られたデータより、森での(1)遊びの「場所」のみ移行したエピソード、(2)遊びの「活動」のみ移行したエピソード(3)遊びの「場所」と「活動」の両方が移行したエピソードの3つに分類された。観察者によって分類した事例数は表1の通りである。

表1. 遊びの移行場面の分類と事例数

遊びの移行場面	事例数
(1) 遊びの「場所」の移行	7
(2) 遊びの「活動」の移行	3
(3) 遊びの「場所」と「活動」の移行	4

(1) 遊びの「場所」の移行

幼児の遊びの場所が、物的環境として存在しているモノからモノへと移動したが、遊びの活動自体は変化しなかった事例である。例えば、ある木から他の木へ移動して木登りをしたエピソードや、梯子から木へ移動してそれらを渡るといった行為をしていたエピソードである。

(2) 遊びの「活動」の移行

幼児の遊びの活動(行為・動作)が変化したが、同じモノが存在する場所で移動が見られなかった事例である。例えば、森付近にあるツリーハウスに付随するターザンロープを使ったロープ遊びから魚釣りごっこになったエピソードや、大きな丸太橋を渡る挑戦的な遊びからその橋の上で虫さがしをはじめたエピソードである。

(3) 遊びの「場所」と「活動」の移行

遊びの「場所」も「活動」も共に移動・変化した事例である。例えば、ロープ渡りから木登りをしたエピソードや、木からぶら下がっているブランコからターザンロープをした事例である。

結果と考察

幼児が森とその付近で遊んでいる様子を観察し、幼児の遊びの「場所」と「活動」がどのように移動・変化したのかを視点に分析した。その結果、遊びの移行は3つのパターンに分類され、これらの移行について森の特性を踏まえながら考察する。

(1) 遊びの「場所」の移行

事例1：倒れている木から森の奥の木へ

【6月19日(木)晴れ：5歳男児1名 女児1人】



男児Aと女児Bは、二人で森に入って行き、横に倒れている幹をつたったり木に登ったりして遊んでいた。

男児Aが木の幹から落ちそうになり、すぐそばにあった木の枝に手をかけた。すると、木の枝が揺れ、昨夜まで降っていた雨の水滴が男児Aと女児Bの頭上に降りかかった。

女児Bは「あめ〜！」と叫び、その声につられて男児Aは、より激しく木の枝を揺らしていた。しばらくすると、男児Aが「他のところもやってみよう。」と言い、その木を離れて森の奥の木へと移動した。女児Bも、男児Aに付いていき森の奥にある他の木に移動し、枝を揺らして水滴が落ちてくることを繰り返しながら遊んでいた。

初めに男児Aと女児Bが遊んでいた倒れた木と、その近くにある森の木々が、幼児の視界に存在している。このことは、幼児が遊ぶ場所を移動した要因の1つだと考える。森の大きな空間には、幼児の見える範囲で木や草花といった自然物が存在する。そのことが、「あの木でもやってみよう」「この木だったらどうなるのか」といった幼児の冒険心や探究心を刺激していると考えられる。さらに、男児Aも女児Bも「木から別の木」へと移り変わる際に、園舎側の木ではなく森の奥側の木を目指して移動していた。幼児の冒険心や探究心は、森という広い空間によって感化され、幼児は自然と森の奥へと進んでいったと考える。森での遊びは、森という空間のもつ特性が幼児の冒険心、探究心に働きかけることによって「水滴を落とすことを繰

り返す」という遊びの質を変えずとも、「木から別の木」へと遊びの場所を変えるという遊びの移行がみられた。

事例2：梯子から木へ

【6月19日(木)晴れ：5歳男児1名 女児1名】



男児Cと女児Dは、地面に置いてある木の梯子を四つん這いになりながら、地面に足がつかないように渡っていた。梯子を渡る際に、地面に足がついたら初めからもう一度始めるという暗黙のルールの中でくり返し遊んでいた。しばらくすると、女児Dが木の梯子の下に重なるように倒れていた木の幹の方へと落ちないように進んでいった。すると、男児Cも続いて木の幹へと移動した。その後は、さらに近くの木の根や木の幹にまで遊びの場が拡大した。

遊具として保育者によって作られ森に置かれていた梯子が、地面に倒れた木の幹と一体化したことにより、男児Cと女児Dの遊ぶ場所が梯子から木の幹へと移動した。2人が渡っていた梯子が木で作られていたこともあり、梯子と森での自然物が一体化していたことが、幼児の遊びの動作も変化することなく、スムーズに場所を拡大することが出来たと考える。

したがって、遊びの「場所」が移行する際には、遊具としての自然物が、広い空間においても密接している環境により遊びの場所を移動させる要因になると考える。さらに、事例1の「雨が降ってくるような枝」や事例2の「梯子のような木の幹」を幼児自身で遊具に見立てて遊びを展開している。このように、自然物を見立てて遊び、その動作や行為を変えないで、異なる場所に移動することができるという環境だからこそ、幼児の遊びの「場所」の移行を可能にする要因となる。

(2) 遊びの「活動」の移行

事例3：丸太橋渡りから虫取り

【5月22日(木)晴れ：5歳女児2名と4歳女児】

女児EとFの2人で、大きな丸太橋を渡って遊んでいた。この丸太橋は女児よりも背が高く、女児たちが両手で捕まっても手が届か

ない程の大きさである。女児Eはこの大きな丸太橋を渡ることができるので、女児Fに対して「怖くなったらEの方見て」と励まししながら、2人だけで長い時間繰り返し丸太橋を渡っていた。

しかし、この丸太橋の近くで虫取りをしていた4歳の幼児が「毛虫——！」と大きな声を発し、その子の周囲に4歳児3人が集まり、見つけた毛虫を全員で見て、また虫さがしを始めていた。それまで、2人だけで集中して丸太橋を渡っていた女児EとFだが、自分たちが遊んでいた丸太橋の近くで盛り上がっている4人の集団が気になるようになる様子であった。その後、女児EとFも虫さがしを始め、4歳の集団の方へ毛虫を見に行ったり、自分たちで探したりした。

女児EとFは遊んでいた丸太橋の場所の移行をしない状態で、遊びの活動を移していた。これは、幼児の身体よりも大きな丸太橋の近くに木や草花、虫などの自然物が多く存在することで幼児が自然を身近に感じることができるという特性を森がもっているからだと考える。そのため、森では「丸太橋」という人工的に作られたあそび場が、幼児の興味に合わせて「虫探し」の場にもなり、遊びの境界が曖昧になり、同じ場所でも異なる遊びが可能になると考える。これは、園庭などにある遊びの動作が特定されたブランコや滑り台等の固定遊具では見られない遊びの活動の移行だと考える。

事例4：シーソーから木渡り

【6月26日(木)晴れ：4歳児4名】

4歳児4名が森の中にある細長く横になっている木をシーソーに見立てて遊んでいた。その木の先には青いバケツをかけており、子どもたちが勢いよく跳ねることで、木が揺れて、その先のバケツも揺れていた。子どもたちは、そのバケツが揺れることが面白いのか、揺れるたびに反応し笑いながら遊んでいた。



その後、バケツが転がって行き、すぐ近くにあった崖から落ちてしまった。子どもたちはその様子もおかしかったようで、笑いながらバケツが転がっていくところを見ていた。

その後幼児4人は落ちたバケツは拾わずにそのままにした状態で、シーソーの見立て遊びを再開した。バケツがないまま、シーソーを続けていたが、一人の子がその場所から離れると、シーソーの木を他の子が渡り出した。そのまま、しばらく木を渡って遊ぶということを繰り返していた。

幼児たちが遊んでいた4人程乗ることができ細長い木が、シーソーとしての遊具的機能を持ったモノから木を渡るためのモノへと活用の仕方が変わった。このことから幼児たちの遊びの活動が移行した。つまり、森にある1つの木が同じ幼児たちによって、異なる遊びをする道具になった。幼児たちは、木という自然物を固定化された遊びだけでなく、幼児たち自身で遊びを見つけて遊び方を変えていた。人工的に作られた遊具は、遊び方が決まっておりの遊び方から外れると危険が生じたり、保育者から止められたりする。しかし、森の中で人工的に作られた遊具ではなく自然物を遊具に見立てて遊ぶ際には、同じ対象物であっても幼児によって使い方が異なる。自然物へのかかわり方は、幼児のその時の好奇心やひらめきによって変わると考える。

したがって、遊びの「活動」が移行する際には、その場所にあるモノの機能を幼児が主体的に変化させることで、遊びの活動も変化すると考える。その際のモノは幼児の身体よりも大きく、森の広い空間の中にあっても存在感のあるモノであった。事例3の丸太橋が幼児よりも遥かに大きく移動できないモノであることが、渡るだけではない遊び方を導きやすいと考える。また、事例4の幼児が4人程乗ることができ細長い木が揺れやすく乗りやすいモノであることが、シーソーや木渡りといった異なる動作での遊びの発想に結びついた要因だと考える。このように、森という大きな空間において、大型な自然物が幼児自身によって遊び方の幅を広げることができる環境だからこそ、遊びの「活動」の移行を可能にした要因となる。

(3) 遊びの「場所」と「活動」の移行

事例5：ロープ渡りから木登り

【6月19日（木）晴れ：5歳 男児2名】

男児GとHがロープ渡りをしていた。ロープ渡りとは、木と木の間にロープが張ってあ

り、そこを子どもたちが渡るようになっている遊具である。そのロープ渡りは、幼児の背よりも高いところにあるために、5歳の幼児たちはそのロープの上を渡ることができるようになるために挑戦している。男児GもHもそのロープ渡りを始めて「こんなんできるよー」「落ちるー」と大きな声でやりとりしながら渡ることに挑戦していた。

その後、ロープ渡りを終えて、近くの木へと移動し木登りを始めた。木登りは一つの木だけでなくその後2人は森の奥の方へと徐々に入って行った。手前の木に登って、次は森に近い木に登って…と奥の方へ2人で声を掛け合いながら入って行った。

男児GとHが遊んでいた森付近にある木の間のロープを渡るための遊具が、ロープ渡りと同じような身体運動を必要とする木登りや木渡りに挑戦させる要因になったと考える。これは、(1)「場所」の移行においても要因になったように、森という広い空間の中でロープ渡りという遊具で遊んでいても、幼児の視界に入る程森の木々が隣接している環境であった。そのことが、幼児が遊びの場所を移動する要因となった。また、(2)「活動」の移行においても要因となったように、男児GとHの背よりも高い所にあるロープが「渡る」という行為から「登る」という行為へと変化させたと考える。また、男児GとHは、お互いに呼びかけあいながら、遊びの場所も活動の移行させていた。

したがって、遊びの「場所」も「行動」も移行する際には、森という広い空間の中においても隣接している自然のモノが存在し、そこにあるモノが森という広い空間の中でも存在を示す程の大きさであることが遊びの移行を促す要因だと考える。また、それらを形成している森という広い空間があることに付随して、幼児同士が呼びかけながら遊びの場を広げていく過程の中で、遊びの場所も活動も緩やかに移行していったと考える。

総合的考察

本研究では、森やその付近での幼児の遊びがどのように移行するのかについて、幼児の遊びの移行場面を「場所」や「活動」の移動・変化に着目して分析した。その結果、(1)遊びの「場所」の移行では、幼児が自然物を見立てて遊び、その遊びの動作や行為を変化しないまま、異なる

る場所に移動し遊びを継続することができた。このことは、森の広い空間においても遊具や自然物が隣接し合っているという環境要因が明らかになった。また、(2) 遊びの「活動」の移行では、森という広い空間において、大型な自然物を幼児自身によって遊び方の幅を広げることができた。このことは、森の広い環境の中においても存在感を示す大型の木や丸太橋といった遊具がある環境要因が明らかになった。(3) 遊びの「場所」と「活動」の移行では、以上のような森の広い空間、隣接したモノ、もしくは大きなモノといった物的な環境だけでなく、友達とのかかわりの中で緩やかに遊びが移行していくことが明らかになった。

さらに、これらのことを踏まえると、森やその付近での幼児の遊びの移行について、森という広い空間が構成する物的な環境の曖昧さが、幼児の遊びの移行に関わるのではないかと考えられた。森やその付近で遊びを移行する際には、ある遊びからある遊びというよりも、緩やかに遊びの「場所」も「活動」も移行していった。また、その際には遊びの移行という行為自体を遊びにしていることが見られた。つまり、無目的ではなく、発展的な遊びの移行が見られたと考える。

森やその付近の「場」を構成している「人」や「モノ」が変わらなくても、遊びが移行していく要因には森という広い「空間」が関係している。この空間によって、幼児の遊びも明確に移行するのではなく、緩やかに場所や活動自体も移行するのではないだろうか。

このように、森という空間の特性として、自然物をそれぞれの幼児のひらめきと探究心によって遊具に見立てて遊ぶことのできる曖昧さや、空間の区切りがなく同じ場が遊具での遊びや虫取り場、見立て遊びの場に変化することのできる曖昧さ、目的や次の遊びを求めて移動するだけではなく移動をも楽しむことのできる曖昧さを位置づけることが出来た。遊びの移行の境界が緩やかであることは、遊びのルールが明確であったり、開始と終了の区切りがあったりする中で行われる場面より、許容的で空間や時間に制限がなく可変的な曖昧な時の方が、遊びは移行しやすい。森での遊びは、このような条件を兼ね揃えていると考える。先行研究によって、森は、冒険心を養い、みずから経験するなどの実践が可能となる(佐藤ら2011)場であり、幼児は森で遊ぶことにより自然を身近に感じ

徐々に自然そのものに興味が移っていくこと(中西ら2010)や、幼児自身の意欲に基づき運動が行われ、その運動パターンが豊富であり体力・運動能力の増進が促されること(日切ら2013)が明らかになっている。それらに加えて、森という空間のもつ曖昧さもまた、幼児が森で遊ぶことの意義であり、幼児の自主性や探究心、ひらめきを育むことにつながると考える。

今後の課題としては、森やその付近での遊びの移行を分類することによって、遊びの移行が生じた物的な環境要因は検討できたものの、それら要因に保育環境としての意図がどれほど含まれているのかは検討できていない。保育者が構成している環境の意図から幼児が物的環境をどのように利用しているのか検討する必要があるだろう。

引用文献

- 日切慶子・関口道彦・小嶋治鈴・久原有貫・松尾千秋・杉村伸一郎・七木田敦(2013)「森の幼稚園の保育環境が幼児の体力・運動能力に及ぼす影響—MKS 幼児運動能力検査および新体力テストによる検討—」、『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要第41号』, 115-122.
- 文部科学省(2008)『幼稚園教育要領』.
- 森上史郎・大豆生田啓友・三谷大紀(2013)『最新保育資料集2013』. ミネルヴァ書房. 483.
- 中西さやか・中坪史典・境愛一郎(2010)「『森の幼稚園カリキュラム』における幼児と自然との相互作用に関する研究—他者とのかかわりにみる幼児の変容プロセス—」、『広島大学大学院教育学研究科紀要第三号第59号』, 167-174.
- 小川博久(2000)『保育援助論』. 萌文書店. 54-70.
- 佐藤将之・西出和彦・高橋鷹志(2004)「遊び集団の移行から見た園児と環境についての考察—園児の社会性獲得と空間との相互関係に関する研究 その2—」、『日本建築学会計画系論文集第575号』, 29-35.
- 佐藤史浩・磯部裕子(2011)「Waldkindergarten—ein pädagogischer Ansatz—森の幼稚園—教育的な試み—」、『宮城学院女子大学発達科学研究(11)』, 43-51.